

尺度使用マニュアル

<尺度名>

日本語版 Ten Item Personality Inventory (TIPI-J)

<測定概念>

Big Five や Five Factor Model は、近年のパーソナリティ心理学において数多くの知見を積み重ねている。本尺度は、Gosling, Rentfrow, & Swann (2003)によって構成された、10項目で Big Five の5つの次元を測定する Ten Item Personality Inventory (TIPI)の日本語版である。5つの次元とは、外向性、協調性、勤勉性、神経症傾向、開放性である。

<適用範囲>

尺度構成は大学生を対象として行っている。青年期以降に適用可能である。

<尺度構成手続き>

英語版の TIPI を日本語訳するには、原版の訳語の範囲内で、日本語として Big Five 特性を的確に反映させることを考慮しながら訳出を行った。そして5回の予備調査を行い、結果を見ながら表現を調整し、最終版の表現を確定した。最終版についてはバックトランスレーションを行い、原著者が内容を確認した。

計 902 名を対象とした複数の調査を行い、信頼性と妥当性を検討した。わが国における既存の複数の Big Five 測定尺度との関連を検討し、TIPI-J の妥当性が示された。

<信頼性>

TIPI-J は、正方向と負方向の2項目ずつで Big Five の各次元を測定する。対応する2項目間の相関係数は、 $r = -.59$ (外向性) から $r = -.22$ (協調性) の範囲であり、低～中程度の負の相関がみられた。Big Five 各因子の意味の広がり測定するという目的のためには、あまり高い相関係数を示さないほうが望ましいとも考えられる。

2週間間隔の再検査信頼性は次のとおりである： $r = .86$ (外向性)， $r = .79$ (協調性)， $r = .64$ (勤勉性)， $r = .73$ (神経症傾向)， $r = .84$ (開放性，いずれも $p < .001$)。

<妥当性>

併存的妥当性、弁別的妥当性を検討するために、既存の Big Five 測定尺度である FFPQ-50 (藤島他, 2005)，BFS (和田, 1996)，BFS-S (内田, 2002)，主要5因子性格検査 (村上・村上, 1999)，NEO-FFI 日本語版 (下仲他, 1999) との関連を検討した。結果から、おおよそ予測通りの相関パターンが観察された。また、自己評定と友人評定との相関を検討したところ、外向性 ($r = .52, p < .001$)，勤勉性 ($r = .46, p < .001$)，開放性 ($r = .27, p < .05$) で有意な正

の相関係数が見られた。

<採点方法>

外向性： 項目 1 + (8-項目 6)

協調性： (8-項目 2) + 項目 7

勤勉性： 項目 3 + (8-項目 8)

神経症傾向：項目 4 + (8-項目 9)

開放性： 項目 5 + (8-項目 10)

※各合計を 2 で割って、項目平均値を算出しても良い。

<尺度の使用について>

項目の変更は認めない。また、10 項目のセットで信頼性・妥当性を検討しているため、順番の入れ替え等行った場合には妥当性を保証しない。

(出典文献)

小塩真司・阿部晋吾・カトロニ ピノ (2012). 日本語版 Ten Item Personality Inventory (TIPI-J)作成の試み パーソナリティ研究, **21**, 40-52.

TIPI の原尺度は以下の論文に掲載されている。

Gosling, S. D., Rentfrow, P. J., & Swann, W. B., Jr. (2003). A very brief measure of the Big-Five personality domains. *Journal of Research in Personality*, **37**, 504-528.

<連絡先>

所属：早稲田大学文学学術院

氏名：小塩真司

e-mail: oshio.at [at] waseda.jp

([at]を@になおしてください)

<無料・有料の別>

無料

<著作権関連情報>

研究，教育目的に限り本尺度の使用は自由です。ただし使用に際しては，必ず適切な論文の引用をお願いします。また情報を集約したいため，論文等何らかの形で公表した場合にはご一報ください。